



# Humanity & Nature Newsletter

No.29

December 2010

地球研ニュース



南インドでは1月中旬に収穫を祝うポンガル祭が行なわれる。角にきれいなお化粧をした農家の牛たちが祭りの主役となり、ポンガルの儀式に参加する。インド、タミルナドゥ州で  
(2007年1月14日、撮影:梅津千恵子)

## 今号の 内容

### P2

特集1●地球研第二期にむけて  
水資源管理のための統合知を  
渡邊紹裕×谷口真人×中野孝教×  
窪田順平×檜山哲哉

### P4

特集2●プロジェクトリーダーに迫る!  
農業から透視する環境問題  
—共生と連帯のための Lesson  
佐藤洋一郎+安部 彰

### P6

特集3●所内共同研究会のあり方について(1)  
「環境思想セミナー」をふりかえって  
鞍田 崇×村松 伸×林 憲吾×神松幸弘

### P8

特集4●国際シンポジウムの検証  
第5回地球研国際シンポジウム「多様性の過去と未来」  
多様性から新しい地域主義へ  
阿部健一×辻野 亮×田中克典×中村 大

### P10

特集5●セミナーをふりかえって  
第1回地球研キッズ・セミナー  
地域とのつながりを深めるために  
縄田浩志×神松幸弘×アイズン・ウヤル×  
石山 俊×皇甫さやか×菊地 薫

### P12

■ 前略 地球研殿—関係者からの応援メッセージ  
「梁山泊」に集まろう!  
藤田 渡

### P13

■ 所員紹介—私の考える地球環境問題と未来  
湖水や堆積物からウイルスの動きを知る  
本庄三恵

### P14

■ お知らせ  
イベントの報告、研究活動の動向、  
平成22年度受託研究費一覧、  
研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)、  
イベント情報

## 水資源管理のための統合知を

話し手● 渡邊紹裕(地球研教授)× 谷口真人(地球研教授)× 中野孝教(地球研教授)×  
窪田順平(地球研准教授)× 檜山哲哉(地球研准教授)

編集● 檜山哲哉

21世紀の地球環境問題を考えるうえで、「水」問題は大きな比重を占める。水に関わるプロジェクトを広く実施してきた地球研だが、第二期中期計画においても「水研究」は中心課題である。質と量をいかに維持・確保するか、平衡かつ効率的・持続的に利用するにはどうすればよいか、どこに根源的な問題があるのかなど、課題は多い。地球研がめざす設計科学や風水土イニシアティブの進め方にも触れつつ、地球研の第二期中期計画における水関連研究の方向性について5名の研究者が語りあった。

## 地球研第一期の水関連研究プロジェクトからみえるもの

谷口●第一期の水関連研究は、地球研叢書『水と人の未来可能性—しのびよる水危機』というかたちで、あるていどレビューされています。2009年12月の地球研東京セミナー「人・水・地球—未来への提言」でも取り上げました。これを踏まえて、第一期の水関連研究の成果から議論しましょう。

渡邊●第一期には多くの水関連の研究プロジェクトがあり、それぞれが評価されました。ただ残念ながら、その成果や評価が地球研として今後活かせるかたちでは整理されていません。個別の地域における問題はかなり明らかになりましたが、そのすべてを見通した上で問題点は捉えられていないのではないのでしょうか。所内でこの全体を見通した議論が必要です。第二期の研究で求められるのは問題解決のための「統合的水資源管理」のあり方であり、「water management」を英語の説明に付けようとした風水土イニシアティブはその中核になるでしょう。

窪田●第一期には、統合的水資源管理にフォーカスしたプロジェクトは少なかった。結果的に、この地域のこの部分の水管理が悪かったという結論に帰結したものもありましたが、多くはさまざまな水循環の断絶を探り出すにとどまったように思います。水資源管理がうまくできて

いない地域ばかりを研究対象にしてきた結果ともいえます。

中野●結果としての現状把握はできて、そのあり方を研究の目的としていなかったから、管理の問題に帰着できなかったと思います。第一期は認識科学的アプローチのプロジェクトが多く、設計科学的な「管理のあり方」への取り組みが弱かったということでしょう。

渡邊●水循環と人のかかわりについてはかなり整理できたが、どうしてそうなったかの議論が少なかった点は否めません。谷口●どこでどんな問題が起こっているかはわかってきた。でも、それがどうしてなのか、今後どのようにすべきかについて整理できていないのだと思います。

渡邊●howを探る認識科学的アプローチから、whyを問わざるをえない設計科学的アプローチに発展させる必要がありますね。中野●設計科学的な課題を前提にして、それに答えるための方法を統合していくことも必要でしょう。

## 「水」をベースにした認識科学と設計科学、その出口とは？

窪田●whyを扱うにしても、社会科学的な要因を取り入れてこなかったのが自然科学的アプローチの大きな問題点だと思います。例えば黄河断流は黄土高原に木を植えずぎたことに起因するという大きな原因をえぐり出しても、ではなぜ木を植えずぎたのかについての議論がほとんどない。政策決定のメカニズムが悪いのか、そこに至るまでの認識科学的知見が足りなかったのかなど、もっと議論していく必要があります。

檜山●第二期で設計科学的アプローチをめざすことはよいでしょう。ただ、海外での研究の場合、設計科学的研究のゴールを政策に安易に結びつけると、内政干渉につながるのではないかと危惧します。谷口●今年度から始めた所内のEPM (Environmental Policy Making) 勉強会で



アルゼンチン、サン・カルロス・デ・バリローチェ上空よりアンデス山脈を望む。(2009年9月、撮影：細谷 葵)

は、どこかの国に政策を提案するのではなく、政策メニューを出すことを検討しています。どうすべきかの一つの解ではなく、複数のメニューとそれを実現するうえで必要な基準や知見を提示するやり方です。

檜山●では、中国政府に地球研から政策メニューを具体的に提示できますか？

窪田●中国政府に具体的に提示できなくてもよいと思います。政治学の世界では、こういう場合にはこういう政策を採用すべきという議論が、国際会議や学術雑誌で行なわれています。政治学的分析としての状況に応じた政策オプションの議論です。相手側が採用するか否かではなく、学術的なゴールとしての政策メニューの提示はありうる議論だと思います。

檜山●なるほど。しかし、具体的な設計科学のゴールを地球研としてどのように設定するのは重要なのではないのでしょうか。

谷口●たとえば、一方の流域には手を付けず、他方の流域は森林伐採して双方の流出量を比較する paired catchment のやり方のように、制度を変えない場合と研究者との議論をふまえて制度を変えた場合との比較研究もすでに英国では始まっ



（右から）  
くぼた・じゅんへい

専門は水文学、森林水文学、砂防学。研究プロジェクト「民族／国家の交錯と産業変化を軸とした環境史の解明」中央ユーラシア半乾燥域の変遷プロジェクトリーダー。二〇〇二年から現職。

ひやま・つや

専門は生態水文学、水文気象学。研究プロジェクト「温暖化するシベリアの自然と人」水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応「コアメンバ」。二〇一〇年から現職。

なかの・たかのり

専門は環境資源地質学、同位体地球化学。研究推進戦略センター研究推進部門長。二〇〇九年から現職。

たにくち・まこと

専門は水文学。研究プロジェクト「都市の地下環境に残る人間活動の影響」プロジェクトリーダー。二〇〇八年から現職。

わたなべ・つきひろ

専門は農業土木学。研究プロジェクト「乾燥地域の農業生産システムに及ぼす地球温暖化の影響」プロジェクトリーダー（二〇〇七年三月終了）。研究推進戦略センター戦略策定部門長。二〇〇七年から現職。



の側面にまで踏みこむべきだと思います。

## 灌漑から探る「水土の知」

谷口●少し具体的な例を考えてみましょう。渡邊さんはトルコとエジプトを主な対象として基幹プロジェクトを構想中ですが、なんらかの想定が仮説としてあるのでしょうか。

渡邊●古代エジプトと現在のトルコ南東部乾燥地域との比較で、灌漑を中心とした水利用についてみんなが良いシステムと思っているところと、そう思っていないところとの対比ができると思っています。湿潤地域では、みんなが持続的と思っているシステムとしてバリ島のスバックがある一方で、問題化したスラウェシ島やスマトラ島がある。なにをもって成功とし、なにをもって失敗と判断するのかについても考えようとしています。

谷口●灌漑の功罪のようなものを、乾燥地域と湿潤地域とで比較しようということでしょうか。灌漑の意味を乾燥地域と湿潤地域とで比較した場合、それは同じような比重ではなく、やはり乾燥地域のほうが重要な問題になると思います。

渡邊●水が足りない場所や時季に水を供給するシステムが灌漑ですが、地域の水管理を行なうということでは、湿潤地域も乾燥地域も同じです。そのなかで注目すべきは地域の土地や水を利用していくための「知恵」で、私は「水土の知」とよんでいます。多様な知恵がどう噛み合い、どう機能した時に、どううまくいったりうまくいかなかったりするか。それには成否を判断する指標が必要となります。それをさまざまな地域に当てはめて整理したいと思っています。

檜山●そのインデックスには、地域の文化的・歴史的・社会的背景もかかわってきますね。そこまで踏み込んだ研究をして、「水土の知」としてまとめる……。

渡邊●そう。たとえばバリ島には日本と同じように地域の文化や生活に根ざした

水利組織があります。安定した水管理の根幹です。それを単純にまねてスラウェシ島などでやろうとしてもうまくはいきません。バリには独特の地形や気象、水文の条件で形成された風土を活かした知恵があります。それはなんであり、他の地域に活かせるものはなにかを求めたいのです。統合的水資源管理というキーワードが適当かは別として、水に関してどのようなアクションを起こすのか、その方向をデザインするのが第二期の風土イニシアティブの課題だと思います。これまでのプロジェクトの成果の分析・整理をイニシアティブでどう進めていくかがスタートの課題ですね。

中野●西条市の例に戻りますが、設計科学の出口は直接的な政策提言というかたちでなくてもよいのではないのでしょうか。研究者が認識科学的知見を提供しつつ、議論を踏まえた上で、将来の水問題に対処できる仕組みを提案することでもよいと思っています。

谷口●うまくいっている事例を取り入れて比較しながら、西条市としてどうしていったらよいかを、地域と研究者がいっしょに考えるわけですね。

渡邊●行政を含めた西条市の人たちが、研究者との意見交換を踏まえながら、みずからの将来の水の使い方について決めていくことになればよいでしょう。それが設計科学の出口の一つだと思います。

中野●広い意味でのキャパシティ・ビルディングですね。

渡邊●システムとしてのキャパシティ・ビルディング。informationから knowledge、wisdomへの展開をよく問題にしますが、地球研での「統合知」は「wisdom」と思います。そして、informationから knowledgeに組み上げていくところが、第二期で目指すところの「設計科学」の基礎となります。これは所内の合意とはなっていないので、どんどん議論していきたいですね。

2010年10月6日 「地球研セミナー室1・2」にて

ています。

窪田●それは無理かもしれません。政策決定の過程にステークホルダーが参画する段階で、われわれが研究者としてかかわることはあっても、実際にやるかどうかを決めるのは当事者です。2010年9月に風水土イニシアティブ研究会を開催した西条市の場合だと、自治体が地球研との共同研究母体として加わっています。そのように研究者が助言しながら地域を見守っていくスタイルやプロジェクトはありえると思います。

中野●文理融合でいうと、未来シナリオにもとづいて政策メニューを出していくことが考えられます。しかし未来シナリオをつくること自体たいへん。シナリオ自体に不確実性があるからです。

渡邊●第一期には「こうあるべきだ」というのは言えないとされてた。言えるのは「これだけは止めましょうね」まで（笑）。それ以上踏み出せなかったわけです。

檜山●政策提言に資する研究とは、「政策決定に必要な材料を提供する研究」でしょう。その材料とは認識科学の結果そのものだと思いますが、いかがでしょうか。

窪田●そういう側面もあります。それでも第二期では自然科学的結果の提示にとどまらず、可能ならば管理システムの設計

# 農業から透視する環境問題——共生と連帯のための Lesson

研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき——ユーラシア農耕史と環境」〈文明環境史領域プログラム〉

話し手●佐藤洋一郎(地球研副所長・教授)+聞き手●安部 彰(地球研プロジェクト研究員)

農業と環境の関係史を学術的視点から捉えなおし、未来の農業のあり方を考える研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき——ユーラシア農耕史と環境」。2010年度で終了をむかえる「里プロジェクト」リーダーの佐藤洋一郎教授に、プロジェクトたちあげの意図や成果について話をうかがった。

安部●佐藤プロジェクトは今年度が集大成の年ですね。これまでの歩みについては「農耕と環境の一万年史」\*が簡にして要をえた紹介となっています。未見の方にはぜひご覧いただきたいのですが、本日はその枠内に問題関心を禁欲することなく進めさせていただきます。

まず、あらためて原点回帰といいますか、プロジェクトの目的と成立経緯を簡単にふり返ってください。

## 農業ぬきで環境問題は語れない

佐藤●農業をメインテーマにしたプロジェクトをたちあげた背景には、農業が環境問題の原点であるという認識がありました。そもそも人間にとって農業とはどういうものかという根本の理解を抜きに、環境問題の根源的な考察はできないとの思いがありました。たとえば、生態学者と農学者が生物多様性のなにが重要かをめぐり議論したとします。すると、生態学者は山の清水を指して、「これが大切なんだ。田んぼは泥水を川に流すからけしからん」と非難する。そのような論調が、少なくともかつてはかなり強かった。

とはいえ、人間は食べねばならんから、農業というプロセスは不可欠です。しかし、必要性を強調するだけではこの議論は平行線のままです。そこで考えたのが、「農業が環境を破壊するとき」というテーマ。「農業が環境を破壊する」では生態学の人たちと変わらない。「とき」という一語を入れたのがポイントです。

安部●「とき」にこめられたのは、破壊する「場合と条件がある」ということですね。

佐藤●そのとおり。というのも、農学者は生態学者の非難に猛烈に反発するわけです。しかし私は農学者に、農業が環境を破壊する「とき」もやっぱりあるんだよ、と言ってやりたかった(笑)。

安部●そうした経緯から、歴史的アプローチに軸を据えられたわけですね。

佐藤●農業も人間の営みの一つです。この営みを通じて、人間はその時どき、なにを考え、いかに行動したのか——つまり「人間とはなにか」という壮大な問いが、私の研究関心の根底にあるのです。

## 生物多様性と農業の微妙な関係

安部●最終年度を迎え、いわゆる落としどころも見えてきたのではないのでしょうか。そこでお聞きしたいのは、なにがわかり、なにがわからなかったか、です。

佐藤●学術的には、いまの時点で私はまったく納得していません。地球研の場合、単に地球環境問題の解決策を提起すればよいのではなく、学術的にしっかり裏づけしたうえで示さなければならない。これはそうとうに至難の業です。

もちろん成果は大いにありました。なかには、生物多様性問題に実践的に貢献できそうなものもあります。

2009年11月にバンコクに12か国から120名ほどの研究者を集めて開かれた「野生イネ会議」をプロジェクトとして共催しました。東南アジアは生態的にも文化的にも多様な地域で、稲作中心という点では日本とも共通性がありますね。しかし、その東南アジアでいま、稲作の多様性の消失が起こっている。

たとえば、稲の原種になった植物は、かつては水辺のいたるところに生えていて、いくなれば人間の生活と共存していました。土

地利用なども含めて、それらが醸しだす独自の生態的・文化的環境があったわけです。しかし、ここ20年ほどでそのような環境が急速に失われてしまいました。経済発展に伴う環境変化がその要因です。イネの原種は道路ぎわの水路にたくさん生えていたのですが、道路の拡幅によって消失しました。あるいは、水牛が雑草を食べるなどしてバランスのとれていた生態系が、水牛の利用が減ったことで野生イネのニッチが喪失しつつあるのです。

こうした研究成果にもとづいて、会議の最後には、野生イネを守るために各国協力を提言したバンコク・リコメンデーションが採択されました。これを盾にとつて、批准した各国政府に具体的な政策的アクションをとるよう、プロジェクトとして働きかけているところです。当初の構想からはまったく想定外の成果でしたが、学問研究が社会に貢献できる一つの道筋を示すことができたと思いますね。

安部●意図せざる結果——これは研究の醍醐味ですね。

佐藤●そう、失敗から学んだという意味でも、印象的な成果がありました。多くの生物学者と同じように、私も当初は遺伝的多様性が喪失すれば問題が起こると



ブータンの水田

\* 佐藤洋一郎「農耕と環境の一万年史」佐藤洋一郎監修・鞍田崇編『ユーラシア農耕史5——農耕の変遷と環境問題』、臨川書店、2010年

あへ・あきじ  
専門は社会倫理学。研究プロジェクト「病原生物と人間の相互作用環境」プロジェクト研究員。二〇一〇年から現職。



さとら・よういちろう  
専門は植物遺伝学。研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境」プロジェクトリーダー。二〇〇八年から現職。



中国新疆ウイグル自治区の小河墓遺跡の遠景。プロジェクトでの中心的な調査地の一つとなった

考えていました。そういう事例がたくさんあるだろうと調べてみたところ、もちろんあるにはある。たとえば19世紀のジャガイモ飢饉や、日本の東北地方の大冷害(1993年)などは、そうしたケースと考えられます。しかし、どうも事はそう単純ではない。問題が起こることもあれば、起こらないこともある。これは意外でした。日本では50年間コシヒカリをつくっているが、すこしも壊滅しないじゃないかと言う人がいる。たしかに崩壊していないのです。

安部●それは壊滅しない条件があったからでは？ 本質的にしないんですか？

佐藤●本質的に、ではない。つまり、「遺伝的多様性が喪失すると問題が起こる」は、「遺伝的多様性が喪失すると問題が起こるリスクが大きくなる」と、より正確にいうべきだった。

### 雑草が農業を保障する

安部●リスクの話が出たのでおうかがいします。『ユーラシア農耕史 5』の「あとが

き」に、『火』と『雑草』はわたくしどもが農耕と環境の関係史のキーワードとしてきたものである」とあります。ここに佐藤さんの「立場」が象徴的にあらわれていますね。つまり、火も雑草も、現在の社会(農業)においては「よからぬもの」、抽象的な言葉で言い換えれば「他者」とみなされている。ところが佐藤さんは、「他者」を受容する感受性を大切にしようと、ことあるごとに主張されている。

ところで、佐藤さんが「他者」が大切だというとき、それはリスク・ヘッジの観点から「のみ」なのでしょうか。つまり、われわれ人間に有用でないなら「他者」は根絶されてもよいのでしょうか。

佐藤●根絶はまず不可能でしょう。これは事実判断というより、思想ですね。イネ、コムギ、ダイズなど、世界各地に広まった作物を考えると、少なくとも一度は畑の雑草の遺伝子をもって成長してきた歴史がある。これはかなり普遍的ですね。われわれが農業という営みのなかでつくりあげたものは「雑草」だともいうことが

できる。両者を分けているのは人間にとって有用か否かという線引きでしかない。作物と雑草に生物学的な違いはほとんどなく、一方を否定することは他方を否定することにもなりかねない。存在の位置関係というのは相対的なものでしかありません。だから、よいものだけを集めた社会なんて存在しないと思いますよ。そもそも、自然科学では価値判断の話はできないのではないかと。生態学者も生物多様性の価値について考えてこなかったわけだから答えが出ないのはあたりまえで、価値判断は哲学の仕事でしょう。

安部●価値判断も科学的認識と同様に「現実」を構成する一要素です。その意味で、世界は「発見」されるものではなく、不断に「創造」されるものです。佐藤プロジェクトの世界「創造」的な成果が、「生存知イニシアティブ」をはじめ、いたるところで批判的かつ発展的に継承されることを楽しみにしています。

2010年10月12日 地球研「プロジェクト研究室」にて

# 「環境思想セミナー」をふりかえって

話し手 ● 鞍田 崇 (地球研特任准教授) × 村松 伸 (地球研教授) ×  
林 憲吾 (地球研プロジェクト研究員) × 神松幸弘 (地球研助教)

佐藤プロジェクト\*1が主催した「人と自然：環境思想セミナー」。毎回ゲスト・スピーカーを招き、2007年6月から2010年9月にかけてほぼ毎月開催されたこの研究会は、番外を含め35回を数えた。地球研において「思想」を語る初めての試みは、所外にも広く開かれた研究会という点でも前例がなかった。その成果と課題を振り返り、今後を展望する。

神松●2007年から2010年まで、ほぼ毎月開催された「環境思想セミナー」を企画されたのが鞍田さんです。そのきっかけを教えてください。

## 「思想」を語る初めての研究会

鞍田●ちょうど立本所長が就任されたころでしたが、「思想」を語る研究会をやってはどうかという声は所内からあがりました。地球研にはそれまで「思想」を語るような場がなかったのです。すると、佐藤洋一郎さんが「うちに哲学を専門とする研究員がいるのでやりましょう」と手をあげて、私に打診がありました。参加者は、最初は所内の研究者だけでしたが、回を重ねるうちに所外からも少しずつ集まるようになって、「なるほど、所内だけではもったいない」と一般の方にも参加の枠を広げました。最終的には、そのことが地球研の研究会の新たなあり方を探るきっかけになりました。

神松●所外の方が多く、しかも層の幅が広いことが特徴でしたね。リピーターの方も多かったのですか。

鞍田●ええ、あしかけ4年にもわたりましたから。内容が多岐にわたっていたので、関心のある回には参加するという方も多かったですね。

神松●テーマの設定やゲスト・スピーカーの選定はどのようにされたのですか。

鞍田●選定の方針は年をおって変わりました。しだいに必要なのは思想の「解説」ではなくあえていえば「創造」ではないかと感じ、研究者よりも関連分野の作り手、

たとえば陶芸家とか建築家などをメインにおくようになりました。最終年度は、いわゆる「ベテラン」よりも、これから新しいものをつくろうとする30~40代の人たちの声にフォーカスしました。同じテーマで、内容を掘り下げたり、ゲストの世代を変えたりもしましたね。最終的に基本テーマとなったのは、「暮らしの“かたち”」です。

## 研究者と一般人がともに集う意義

神松●生活スタイルなど、身近なテーマから環境を考えたことで、一般の方にも受け入れやすかったと思います。地球研所員や他のプロジェクトとのかかわりについてはどうでしたか。

鞍田●あのセミナーが地球研になにをもたらしたのかですが、率直に言って地球研内のシーズを掘り起こす場にはならなかった。プロジェクトの行事という位置づけでしたし、企画はあくまでプロジェクト内で、場合によってはほぼ一人で行っていたことが、その反省点ですね。

村松●他の所員にはよくわからない企画だったのかな。

林●どうつくるかという、アート活動などで実践している人に焦点を当て、ゲスト・スピーカーを選定していましたね。これは地球研が第二期の目標として掲げている「設計科学」に通じます。地球研の研究会にはアカデミックなスタイルが多いのですが、別の色づけをしようという戦略があったのでは……。

鞍田●もちろんありました。地球研だからこそできる社会に対する発信の仕方があるはずだと思っています。できあがったものの解説ではなく、いま動いている「もの」や「こと」を魅力的に伝えたい。これを意識しました。これまでの地球研にはあまりなかった点です。

神松●研究者と一般の方がともに集う研究会は、たしかにこれまでなかった。これが成功したと思います。成果の発表ではな



セミナーのようす(2010年7月21日)

く、素材を持ち寄ってみんなで新たなアイデアを生み出す会を目指したのですね。鞍田●そうです。最初から意図したわけではありませんが、手探りしているうちにそういうところに到達した。地球研市民セミナーのようなぎっちりしたスタイルはあえて避け、これから環境問題を考えてほしい若い世代が参加しやすい雰囲気をつくるよう心がけました。

## 会場に広がる熱気の源泉

編集室●地球研市民セミナーはあくまで地球研やプロジェクトの成果を一般の方に伝えるのが趣旨です。コンセプトが違えば、スタイルも違ってきますね。

村松●地球研市民セミナーやフォーラムには年配の参加者が多い。環境思想セミナーは若い人が多く、市民セミナーより熱気があるように感じた。これは地球研やプロジェクトの成果に魅力がないということなのかな。

鞍田●そう極端には分けられない。地球研の研究成果として伝えなければいけないこともありますね。

林●見せ方の問題かもしれないですね。

鞍田●熱気といえば、フラワー・アーティストの東さんをゲストに迎えたときに意識したことがあります。かつて人間文化研究機構の主催で「人はなぜ花を愛でるのか」というシンポジウムをやりました。これにたいして、東さんのときのタイトルは、「俺はなぜ花を愛でるのか」。東さん自身が花を好むこともあったのですが、「人は」ではあくまで一般論です。そうではなく、グローバルな問題を「俺は」から始めることで、自分の問題としてリアルに考えてみようという企画でした。熱気はそんなところから発生していたと思う。個人の意識改革で問題が解決

\*1 正式名称は「農業が環境を破壊するとき——ユーラシア農耕史と環境」プロジェクト

\*2 正式名称は「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト——そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」プロジェクト



右手前から時計まわりに  
くらた・たかし  
専門は哲学。研究推進戦略セン  
ター特任准教授。二〇一〇年か  
ら現職。

むらまつ・しん  
専門は建築史。都市史、都市  
環境文化資源学。研究プロジェ  
クト「メガシティが地球環境に  
及ぼすインパクト」そのメカ  
ニズム解明と未来可能性に向  
けた都市圏モデルの提案。プロ  
ジェクトリーダー。二〇〇九年  
から現職。

はやし・けんこ  
専門は建築学。研究プロジェクト  
「メガシティが地球環境に及  
ぼすインパクト」そのメカニ  
ズム解明と未来可能性に向  
けた都市圏モデルの提案。プロ  
ジェクト研究員。二〇〇九年か  
ら現職。

こうまつ・ゆきひろ  
専門は動物生態学。研究推進戦  
略センター助教。二〇〇三年か  
ら現職。

編集●編集室

するほど環境問題は単純ではありません。しかし、いったんはそういうところに落として考える必要がある、思想の役割はそういうことだと思います。

林●どちらも必要でしょう。身近な「暮らし」を考える環境思想セミナーに関心のある人が、かならずしもグローバルな地球環境問題や自然科学的なデータに基づく研究に興味があるわけではない。両方を横断するにはどうするべきか、これも課題だと感じています。

鞍田●そうですね。自分の専門分野を取りあげるにしても、地球研でやる以上はそういうしつけや意識は必要です。

林●私たち村松プロジェクト<sup>\*2</sup>で次にやろうとしている「京都セミナー」も、外部からゲストをお招きして話を聞くことが中心になる予定です。しかし、ただ聞いて

終わるのではなく、それを素材として新たに編集しなおさないといけない。実践者の話を聞いて、さらにどういうことができるかまで考えなければいけない。とても難しいことなのですが……。

神松●前年度開催した「未来環境デザインセミナー」では所員同士の議論が活発だったように思うのですが。

林●建築をやってきた私が、企画の段階で自然科学が専門の方と話しあえたことがすごい刺激になった。セミナー当日はもちろん、終了後も意義などについて話しあうことができました。

村松●地球研には多様な分野の方が集まっているのですから、共同研究会では活発な議論にならないとね。

鞍田●研究会としての目的をはっきりさせることも重要だと思います。

## 「環境思想セミナー」を引き継ぐ村松プロジェクト

林●村松プロジェクトが「環境思想セミナー」を引き継ぐようなものをやろうと考えたのはなぜですか。

村松●日常の暮らしをおもに扱った環境思想セミナーと、都市生活の問題に取り組む私たちの分野とが比較的近かったことが一つですが、京都をテーマにすることは前から考えていました。地球研はせっかく京都にあるのに、京都を見ないのはもったいない。地球研の研究者は世界的なことをやっているが、足元を見ていないと海外で通用しないと思う。

神松●「京都」がテーマなら地球研の研究者もかかわりやすいかもしれません。ただ、先ほど林さんが指摘されたように、事実を並べるだけでは解説でしかない。どういうアクションを考えていますか。

村松●どういうことでも、少し調べればあるていどまでは到達する。難しいのはそこから一段階超えること。専門家をただ並べるだけではおもしろくない。それを融合してなんとか「次」の段階に進むためにも、毎回新しいことに挑戦したい。

神松●研究者は、これまでの研究会のスタイル以外で発信することも求められているのですね。研究者としてのかかわりを広げるというか。建築が専門の村松さんたちならいろいろなアプローチが可能な気がします。

村松●ぜひ神松さんもやってください。神松●セミナーに加わって勉強したいと思っています。テーマを考える段階で地球研のそれぞれの分野の人に加わってもらうのもアプローチの一つでしょうか。

村松●研究会を通じてプロジェクトとしても蓄積を増やしたい。そういうことも含めての研究だと思います。

神松●検討すべきことはまだまだ多いでしょうが、期待しています。詳細が決まればニューズレターでも紹介します。

2010年10月27日 地球研「はなれ」にて

## 「環境思想セミナー」開催一覧

開催日	回	ゲスト・スピーカー	テーマ	
2007	6月26日	1 石塚晴通	北海道大学名誉教授	あるべきやうわ：明恵上人の生涯と自然観
	7月23日	2 松居竜五	龍谷大学准教授	南方熊楠の森
	8月28日	3 堀越光信	四日市市立博物館主幹兼学芸員	神木聖樹の観念と神像の創造
	9月18日	4 鎌田東二	京都造形芸術大学教授	修験道と自然
	11月1日	5 鶴岡真弓	多摩美術大学教授	ケルトから視るユーラシアの自然観
	12月6日	6 鈴木 禎	お茶の水女子大学准教授	民芸運動の自然観と生活のかたち：バーナード・リーチをてかりに
2008	1月31日	7 納富信留	慶応義塾大学准教授	ピュシスとノモス：初期ギリシア自然学からソフィスト思潮へ
	2月22日	8 馬場 徹	建築家・建築商会主宰	棲む：建築と自然の歴史的関係
	4月24日	9 熊倉功夫	国立民族学博物館名誉教授・林原美術館館長	茶の湯とは何か―別なるライフスタイルへの問いかけ
	5月23日	10 丸ノコリーレヴィン	カリフォルニア大学バークレー校准教授	沈黙する美学：アートとエコロジーの対話の試み
	6月13日	11 十五代 樂吉左衛門	陶芸家・楽美術館館長	深き淵より—de profundis：やきものの現在と自然
	7月15日	12 川瀬敏郎	花人	近き花、遠き花：「たてはな」と「なげいれ」に見る自然との関わり
2009	8月21日	13 堀場弘之	料理人・京料理「六盛」主人	千年の食卓：平安王朝における食材と料理
	9月8日	14 中川 明	カトリック垂水教会神父	人間—この有限的なるもの：キリスト教における自然と原罪思想
	10月1日	15 姫田忠義	民族文化映像研究所所長	われわれは何を失ったのか：焼畑と日本の基層文化
	11月20日	16 木下史青	東京国立博物館デザイン企画室長	気配の痕跡：展示デザインと空間の記憶
	12月22日	17 安藤礼二	多摩美術大学准教授	掌に握りしめた雪のように：折口信夫と近代のゆくえ
	2月9日	18 新木直人	賀茂御祖神社宮司	神游(かんあそび)の庭(ゆにわ)：糺の森の原風景をもとめて
	4月15日	19 坂田和實	古道具「坂田」主人	素であること：生活の「寸法」
	5月13日	20 栗本夏樹	漆作家・京都市立芸術大学准教授	うるわしの暮らし：聴竹居との出会い
	6月24日	21 東 信	フラワー・アーティスト	俺はなぜ花を愛でるのか：AMPS AZUMA MAKOTO PRIVATE SEMINAR
	7月10日	22 長谷川祐子	東京都現代美術館チーフキュレーター・多摩美術大学特任教授	エコロジーへの感性を養うアート
	8月14日	23 鷲田清一	哲学者・大阪大学総長	身体環境としての衣服
	9月16日	24 飯田辰彦	ノンフィクション作家	生きているスローフード：椎葉村だより
10月26日	25 柳原睦夫	陶芸家・大阪芸術大学名誉教授	風土の中のうつわ	
11月18日	26 柴田敏雄	写真家	another view —ランドスケープのゆくえ	
2010	12月16日	27 川島智生 松隈 章	建築史家 竹中工務店・聴竹居倶楽部代表	1928—風土・民芸・聴竹居
	2月10日	28 中井弘和	静岡大学名誉教授	Love Agriculture：いま農業にできること
	4月14日	29 清水蘭子	染織家	丁寧ということ：色と布と語りあう日々
	5月21日	30 石上純也	建築家	自作について
	6月16日	31 諏訪綾子	food creation主宰	味のの零度
	7月7日	番外 宇根豊ほか	農と自然の研究所主宰	人と米をめぐる研究会「人、米を醸す」
	7月21日	32 三谷龍二	木工デザイナー	暮らしに寄り添う
	8月31日	33 久住有生	左官	「土に住まう」
	9月24日	34 尹 熙倉 森 桜	美術家・多摩美術大学准教授 アートコーディネーター・森オフィス代表	「エビログ—そこに在るもの」

第5回地球研国際シンポジウム「多様性の過去と未来」

# 多様性から新しい地域主義へ

話し手 ● 阿部健一(地球研教授) × 辻野 亮(地球研プロジェクト上級研究員) × 田中克典(地球研プロジェクト研究員) × 中村 大(地球研プロジェクト研究員)

編集 ● 中村 大



EYZAGUIRRE, Pablo氏(Biodiversity International, CGIAR)による基調講演の様子

- テーマ The Past and Future of Diversity
- 内容 Session 1 Landscape as a Source of Cultural Diversity  
Session 2 On the Nature and Culture in Agrobiodiversity  
Session 3 Biodiversity and the Wisdom in Agrarian Landscapes  
Session 4 Summary and Round-Table Discussion
- 開催概要 2010年10月13日(水)～15日(金)〈地球研 講演室〉

当該年度に終了するプロジェクトの成果をもとに、毎年10月に開催している地球研国際シンポジウム。今年度は佐藤プロジェクト、湯本プロジェクトに加え、次年度終了予定の内山プロジェクトが企画と運営を担当した。テーマは「多様性の過去と未来」。はたして地球研ならではの国際発信となりえたのか。企画に主体的にかかわった若手研究員たちはシンポジウムの意義と成果をどう評価するのか。

## なぜ多様性をテーマとしたのか

阿部●今年度は国際生物多様性年であり、シンポジウムは生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が名古屋で開催されている最中の実施でした。いっぽうの地球研は、「環境問題は文化の問題」と位置づけています。「生物多様性」をメインテーマ

としながらも、文化多様性も同時に考えるべきだという主張があったのです。辻野●企画の内容を検討する勉強会の段階で、湯本プロジェクトのテーマである「生態系」と、佐藤プロジェクトのテーマである「農業」は、ともに多様性をキーワードとしていることに気づきました。それに、農業や生態系を包含する視点として、「景観」から多様性を考える必要があると……。阿部●そこで「景観」をキーワードにしている内山プロジェクトに参加してもらったわけですね。歴史的な経緯もふまえて将来の「あるべき姿」を議論し、それぞれの立場で「多様性」に切りこんでもらおうと。

## 多様性という概念の「多様性」

辻野●多様性は研究者によって捉え方が大きく違います。そもそも多様性という

用語自体に多様な使い方があります。2007年のユネスコの提言は、生物多様性と文化多様性の相互作用を重視しているし、両者を一体化するような生物文化多様性という用語も使われています。

シンポジウムでは、言語の多様性も含めて、多様性そのものの概念・定義について考える狙いもありました。

阿部●生物多様性と文化多様性は、社会的に構築された比較的新しい概念です。こういう言葉を学術的にも有効な概念とするには、多様性という用語のさまざまな側面に検討を加えることは必要でしょう。田中●社会・個人の意識や価値観は、多様性を考えるうえで欠かせない要素です。なかでも、生物多様性の増減には人間の意識が大きくかかわっています。たとえば、農業は植物の遺伝的多様性を増大させもするし減少させもする。しかも、多様性の価値評価は立場によって異なる。言い換えれば、多様性の維持・確保には、人間の意識・無意識を問わず「選択」が重要なファクターとなるわけです。このことは基調講演を行なった国際植物遺伝資源研究所のエイサギーレ(Pablo Eyzaguirre)さんが、最終日のコメントでも取りあげていました。

中村●多様性の議論では、空間のスケールを適切に使い分けることも大事。生物多様性は、ある地域の生物の種類数を調べて理解しようとする。いっぽう、文化多様性はより広い空間における変異や多様性を、複数の地域の比較研究をもとに検討、理解しようとする。つまり、生物と文化とは異なる空間スケールの現象を扱うとみることができる。そのように、スケールは環境問題を考えるうえで重要なキーワードではないかと考えています。

## 新たな身体感覚としての地域性

中村●文化多様性にかかわるポイントの一つに、現在という時代が、目に見えず





（左から）  
なかむら・おおき

専門は考古学。研究プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化」・景観の形成史プロジェクト研究者。二〇〇八年から現職。

つじ・りょう

専門は植物生態学、哺乳類生態学。研究プロジェクト「日本列島における人間―自然相互関係の歴史・文化的検討」プロジェクト研究者。二〇〇七年から現職。

たなか・かつのり

専門は植物遺伝学、作物育種学。研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき―ユーラシア農耕史と環境」プロジェクト研究者。二〇〇六年から現職。

あへ・けんいち

専門は環境人類学、相関地域研究。地球地域学領域プログラム主幹。研究推進戦略センター成果公開・広報部門長。

しかも巨大なスケールの、ある種のパワーが特定の地域に関与する、「地球時代」であるということがあります。たとえば、私がいまかかわっている北日本の縄文遺跡の世界遺産登録活動は、景観多様性の保全とその活用をめざしているのですが、そこではグローバルな価値観との新たな関係価値の構築が求められています。未体験のスケールに地域住民や研究者がかかわろうとしている。このスケール間の接続がうまくできないと、景観問題になります。多様性や環境問題の議論では空間スケール、とくに地域の視点は重要です。

阿部●食でいえば、見せかけの多様性という問題がありますね。スーパーではいろいろな食材が手にはいる。その地域に暮らす人たちにとって、食の多様性はすごく豊かになったように思える。しかし、そのいっぽうで、その多様性を成り立たせているのが、海外での単一作物の大量栽培・輸出だという現実がある。地球の裏側の出来ごとが、目の前の食べ物に影響を与えている。

カメラマンの星野道夫さんは「近い自然」と「遠い自然」という表現をしていますが、近い自然の生物多様性だけでなく、遠い自然の生物多様性も考える必要があります。

田中●広がりすぎた空間スケールが現代人の感覚を麻痺させているかもしれません。辻野●かつての地域は基本的には眼で見

える範囲であったと考えられますが、現代は身体感覚としての地域性を越えたスケールです。そういう空間、サイズの中でヒトやモノ、カネ、情報が飛び交う時代。そういう環境だと、地域が失った身体感覚を取り戻す手助けも必要になります。見えないスケールの身体感覚化ですね。ヴァーチャル・ウォーターやエコロジカル・フットプリントなどは、見えないスケールの相互関係を気づかせる仕掛けとして評価できる。そういう視点から、私は新しい地域主義の構築という論点を提案しました。生物や文化の多様性は地域固有の歴史性と深く結びついていることを理解しつつ、グローバルな視野も併せもつ開かれた地域主義です。

### ノスタルジック・フューチャー

辻野●過去から集約される情報を未来にどう活用するか、研究者としてながでできるかなど、総合討論は事前に想定していた方向にうまく向かわなかったところもありましたが、予期しなかった成果もありましたね。

阿部●そうでした。ノスタルジーという感覚をもっと積極的に使ってもよいのではないかという指摘はおもしろかった。

辻野●ノスタルジック・フューチャー（懐かしい未来）は魅力的な言葉だと思います。懐古趣味ではなく、歴史的視点の重要性を活かして未来を展望するという視点は「新しい地域主義」にもフィットする。

田中●マイクロでもマクロでも、空間スケールに現実の人間の五感が追いつかない。この状況がノスタルジーをよび起こすのではないか。ノスタルジーは、目に見えるものから感じるもので、地域と人間の心の関係があつてはじめて出てくる。地域とそこに暮らす個人の意識の関係です。ところが、食でいえば、自分の食べているものがどこからきたのか、どう実っていたかもわからないから、味や栄養以上の価値が見出せない。「もったいない」というノスタルジックな標語が流行るのは、自らが暮らす地域の価値の喪失への追慕が一因だと思うな。

辻野●使い方には注意を要すると思いますが、ノスタルジーは多様性を時間軸で整理する有効な用語になるかもしれませんね。

### さらに広い空間軸での議論を

阿部●三つのセッションとも、歴史的な視点から多様性を考えるという視点は共通していましたね。多様性を時間軸の面から考えるということ。この点を、総合討論では充分議論できたでしょうか。

田中●総合討論では時間軸を追いかけることはできたように思う。しかし、地域を見ながら地球規模の出来ごととも考慮に入れるという空間軸の視点は、十分に議論できなかったですね。

中村●各セッションとも、地域の視点から問題をスタートさせたことで議論が具体的になった。総合討論では各地域の問題の背後で関連しあっているグローバルなスケールの視点も含めて、さらに広い空間軸での議論ができていれば、セッションとの関係がさらに明快になったかもしれない。

辻野●研究蓄積をもとに将来どうあるべきかを考える次のステップのために、研究者はどのような研究を進めるべきか、研究のシーズを議論する時間もほしかったですね。



14日のセッションのあいまにはエントランスホールにて、修学旅行で地球研を訪れた愛知県進市立西小学校児童による合唱「MIDORI ～繋がる輪～」が披露され、シンポジウム参加者やたくさんの方々が聞き入った

2010年11月5日 地球研「セミナー室」にて

セミナーをふりかえって

第1回地球研キッズ・セミナー

地域とのつながりを深めるために

話し手 ● 縄田浩志(地球研准教授) × 神松幸弘(地球研助教) × アイスン・ウヤル(地球研助教) × 石山 俊(地球研プロジェクト研究員) × 皇甫さやか(地球研総務課企画室) × 菊地 薫(地球研研究推進戦略センター)

これまで地球研では研究成果をわかりやすく一般市民に紹介することを目的に、「地球研市民セミナー」を開催してきました。この一環として、地域とのつながりをいっそう深めるために開催されたのが、地球研近隣の小学校に通う児童とその保護者を対象とした「第1回地球研キッズ・セミナー」です(ニュースレター第28号14ページに報告記事を掲載)。その意図は果たされたのか、今後の課題はなにか。終了後、企画と運営にたずさわったメンバーによる座談会が行なわれました。

神松●このキッズ・セミナーは地球研としては初めて、子どもとその保護者を対象にした企画でした。まずは企画者の代表として石山さんとアイスンさんから経緯と趣旨を話してくださいませんか。

子ども向け発信の可能性

石山●講師としてお招きした富田さんとはエジプトの合同調査で出会いました。彼はいつも恐竜や化石の話をわかりやすく、楽しく説明してくれる。いつか地球研のプロジェクト研究と連携すればおもしろい講演会になるのではないかと、縄田さんと話していました。

アイスン●私もつねづね、一般の方を対象にした地球研オープン・ハウスをやりたいと考えていました。それが富田さんの講演と結びついて、今回はキッズ・セ



「10万年後の人類」を子どもたちが考え、講師からコメントを書いて返却した

2010年8月23日(月) 13:30~16:00(地球研講演室ほか)

参加者:地球研近隣の小学生と保護者(約100名)

【第一部】キッズ・セミナー

「絶滅した生き物とわたしたち」講師:縄田浩志(地球研准教授)

「恐竜は生きています!カエルは人間のご先祖さま?」

講師:富田京一(肉食爬虫類研究所代表、学習院女子大学国際文化交流学部特別講師)

【第二部】施設見学とプロジェクト訪問

「体験しよう!地球研—きみも未来の研究者」

実験室で体験(冷凍保管室、顕微鏡室)、研究プロジェクト訪問(研究内容への質疑など)

協力プロジェクト

「東アジア内海の新石器化と現代化:景観の形成史」(リーダー:内山純蔵)

「民族/国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷」(リーダー:窪田順平)

「日本列島における人間-自然相互関係の歴史的・文化的検討」(リーダー:湯本貴和)

ナーとして実現したわけです。

私は司会をしていたのですが、「地球環境問題ってなに?」ということ子どもたちに説明することが、私自身にとってもよい勉強になりました。子どもたちは内容にとっても関心をもっていましたから、相互のコミュニケーションがとれていたと思います。もちろん、おとなたちもおもしろがって聞いてくれました。

石山●講演中、たしかにおとなたちもうなずきながら話を聞いていましたね。

神松●まずおとなが関心をもって、それを子どもに見せてあげたいということもあつたのでしょうか。自由に触ることができる動物、化石、レプリカがあつたのもよかった。子ども向きの企画の場合、体験や実感も大切です。

石山●第二部の地球研ツアーも体験型で、それが子どもたちにも楽しかったようです。

神松●ただ、ツアーで「なぜこれを見るのか」という説明を、もう少しわかりやすくできればよかった。とくにおとなに、第一部の講演とのつながりのなかで説明する工夫があればよかったのかもしれない。そうすればこちらの企画の全容を訴えることができたかもしれません。

石山●今回、それぞれの方が、かなり内容をかみ砕いて説明していました。こういう子ども向けの企画を継続していけば、ノウハウも蓄積して、よりよいものをつくりあげていけると思う。

神松●未来を担う子どもたちに向けた企画は、発信する側にとっても楽しいよね。アイスン●研究者とのコミュニケーションが子どもの将来の選択肢を増やしたり、子どものポテンシャルを引き出すとしたら、それは貴重な体験になります。私たちも子ども時代に、そんな体験をしていたのかもしれない。

菊地●終了後のアンケートでも、「子ども向けのイベントを定期的に行ってほしい」という要望がかなりありました。

神松●子ども向けにわかりやすく発信するというのは、物事を単純化することではない。子どもにきちんと伝われば、それはおとなにも伝わります。その意味で、今回のキッズ・セミナーは子どもだけを対象にしたものではなかった。

地球研全体の気持ちと意気込み

石山●事務スタッフの人たちも積極的に準備していたように見うけました。看板とか小道具がすごくよかった。そういったところを含めて、地球研というものの全体の意志を発信できたように思います。皇甫●初めての企画ということで、「どうしたらいいのか」ということをみんなで考えながら準備したことが、よかったと思います。

菊地●協力いただいたプロジェクトの方がたもかなりの手間と時間をかけて準備してくださりました。時間の都合上、ツ

なわた・ひろし  
 専門は文化人類学、社会生態学。研究プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系の研究  
 ーポスト石油時代に向けてープロジェクトリーダー。二〇〇八年から現職。  
 こうまつ・ゆきひろ  
 専門は動物生態学。研究推進戦略センター助教。二〇〇三年から現職。  
 あいすん・うやる  
 専門は国際関係論。国際政治経済。研究推進戦略センター助教。二〇一〇年から現職。  
 いしやま・しゅん  
 専門は文化人類学。研究プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系の研究ーポスト石油時代に向けてープロジェクト研究員。二〇〇八年から現職。  
 こうぼ・さやか  
 地球研総務課企画室  
 さくち・かおる  
 地球研研究推進戦略センター(COPEC)

アーでは各グループ1か所しかまわれなかったのですが、「すべてのプロジェクトを見たかった」という感想も多かったです。アイス●ツアーの待ち時間や移動中の時間に、企画側と参加者、参加者同士がフリー・トークできたこともよかったですね。神松●企画者として今回大事にしたのはどういうことでしたか。縄田●社会と連携して分野横断的に研究し、課題を未来に提起しようとするのが地球研です。ですから、未来世代の子どもたちを前にした企画となると、いつも以上にみなさん、がんばられたのではないのでしょうか。



プロジェクト訪問の様子

神松●子どもが対象だと、こちら側の実力があらわになりますね(笑)。縄田●10歳前後の子どもに地球研の研究内容を示そうとしたら本気にならざるをえません(笑)。だからこそ、協力していただいたプロジェクト、CCPC、事務の三者で、まとまりも生まれたのではないのでしょうか。とはいえ、時間配分、話し方、示し方、内容など反省点もあった。今後ノウハウを構築していく必要がありますね。石山●たしかに、一つひとつの反省点はあるが、今回はみんなの「気持ち」が写り込んだ面もあるように思います。神松●「気持ちと意気込み」は大切。経験を積み重ねればノウハウは蓄積できる。意気込みを持續させることのほうが重要でしょう。縄田●ルーティーン化すると役割をこなすだけになってしまう。石山●「これだけやればよい」ではなく、「こうしたほうが楽しい」という発想で今回は準備できましたね。神松●気持ちと技術のバランスが重要です。

**継続的事業にしていくなめには**

神松●今後こうした企画を継続するうえ

で、技術的にはどのような課題がありますか。縄田●たとえば理化学研究所。あそこには一瞬にして組織全体を知ってもらうしくみが整っています。エントランスに定式化されたボードが設置され、プロジェクトごとの説明がわかりやすく示されているとか……。神松●ボードの案内がいきとどいた施設は多いですね。地球研にもさまざまな来訪者があるが、対応にはまだまだ努力が必要です。縄田●沙漠化への対処でいえば、国連は学習キットや絵本を多言語でつくっています。要望があれば、日本全国のどこにでも持ち運べるような学習キットを地球研が開発すれば、学術的にも社会的にも役立つのではないのでしょうか。それに「お土産」の工夫。今回は「10万年後の人類」の姿をそれぞれの子どもたちに想像して描いてもらい、それに講演者がコメントを書きこみました。自画自賛かもしれませんが、個別にコメントしたという点に価値があったと思います。みんな書いてもらうのを楽しみに待つていたようにでした。

神松●お土産など、子どもたちの記憶にとどまるといいうコンセプトは今後も続けていきたいですね。そうすることで研究を身近に感じてもらえるかもしれない。縄田●冷凍保管庫でのマイナス30度の体験は記憶に残りますね。神松●あれは説明なしでも鮮明な記憶として残ります。縄田●つくってもらった小道具などを学習キットにつなげて、地球研のアウトプットにできればおもしろいですね。

皇甫●子どもにも理解できるといいうことは、みんながわかるものですね。たずさわっている私たち事務スタッフにとっても理解しやすくなります。縄田●さきほどの沙漠化対処の学習キットは研究者や子ども向きに開発されたものですが、世界中の行政関係者からの注文が多いと聞いています。子ども向けの本をつくるという想定でやれば、ストーリーもつくりやすいし、企画側のモチベーションも上がる。神松●完成型を想定しながらやれば、動機づけも、意欲も強くなりますね。内容も充実させやすいのではないのでしょうか。今回も、環境、生き物、化石に加えて、各プロジェクトがかかわっている地域の文化や調査方法などの紹介へとテーマが広がりました。縄田●そういったものをまとめるトータル・デザインがあれば、意義の深い企画になっていくでしょう。「やりっぱなし」ではもったいない。神松●引き続きアウトプットを想定しながら企画力を高めていきたいですね。次回もみんなで協力しながら、力をあわせてやりましょう。

2010年10月6日 地球研「セミナー室」にて



在任中、市川昌広さん（当時 地球研助教授。現在 高知大学教授）とサバ広域調査を行なったとき、キナバル山麓にて

細辻に面した裏門から入り、古めかしい階段を上がる。わたしがお世話になっていた当時、地球研はまだ春日小学校に間借りしていた。教室を改装した研究室は懐かしい趣で、二つくらいのプロジェクトが同居し、「1組、2組……」と呼ばれていた。わたしがいたのは、階段を上がって右に曲がって二つ目、「2組」だった。

### 梁山泊のような場所

仮住まいということもあり、スペースや設備の面では多少の不便もあったが、プロジェクトの垣根を越えた和気あいあいとした雰囲気はほかの研究機関などにはないものだった。とくに、若手の研究員たちは常日頃、分野をこえて「地球環境学とはなにか」というような、いかにも「若い」議論を展開していた。年に一度、一泊二日で「若手合宿」をして、飲みながら夜通し話し込む。メインは、互いのプロジェクトの批判だ。専門的なことはまったくわからなくても、「地球環境問題」の解決をどのように考えるのかという大風呂敷の上で、「こんなプロジェクトはしょうもない」とか、「趣旨と中身が矛盾している」とか言う。自分のプロジェクトが攻撃されたら、その命運を背負って防戦する。どれもこれも大きなプロジェクトで、そのなかに文系理系問わずさまざまな分野が加わっている。それを全体としてこうだ、というふうに守りきらなければならない。なんとも荒っぽい話ではあるが、たいへん活力に満ちた梁山泊だったように思う。

### 可能性を大事にすること

こういう、現状に不満足な若い人がたくさんいて、研究に遊びに心から打ち込む空気は、研究プロジェクトにも大いに影響を与えていたように思う。プロジェクトリーダーなどシニアな先生がたも含めて、おしなべて自由闊達で上下の隔てのない雰囲気、しかも「アホなこと」をおもしろがって大事にしようという共通認識があった。

わたしがいた「持続的森林利用オプション」のプロジェクトでは、リーダーの中静透さんの広いところで、

## 「梁山泊」に集まろう！

藤田 渡（甲南女子大学准教授）

具体的成果に直結しないかもしれない調査活動も自由にさせてもらえた。私自身はマレーシアのサラワク州の森林政策について研究していたが、それだけでなく見聞を広めるために、サバ州を広域に調査したり、プロジェクトサイトの屋久島や阿武隈山地を訪問させてもらったりした。こういう経験は、分野横断、サイト横断のプロジェクト全体の統合的成果を考えるうえで大いに糧になっただけでなく、自分のテーマの調査に凝り固まりがちな頭をほぐして、広い目で多角的にものを考える基礎体力になった。

たとえば、タイの農村で村人が共有林を管理する。サラワクの先住民イバンのロングハウスの間近にアブラヤシ農園が迫る。今年も泥炭地からの煤煙がシンガポールに押し寄せる。多くの調査地で目の当たりにする光景のそれぞれを、政治、経済、文化、生態を統合する一つの大きなうねりとして相互に関係づけて捉えようと意識する。こういう視野や発想は、わたしが地球研からもらった貴重な財産である。

### 梁山泊よ永遠に

地球研は、少々奥まっではいるけど、立派で綺麗な新しい建物に移った。けれども、夜になると人がいなくなる。これはなんとも寂しい。いつも誰かがいて、話しているような地球研であってほしいと思う。そういう雰囲気づくりは意外に難しいものだが、とくに若い人のなかから強力な「宴会部長」が現れ、立本所長をやり込めるくらいの勢いで、「地球環境学」の新しい大風呂敷を広げてほしい。

地球研のスタッフは基本的にはみんな年限付きで、わたしがいた当時の人たちのほとんどが梁山泊を去り、いまでは立派な「先生」になっている。やがて、そういう人たちのなかから、地球研プロジェクトを率いてゆくような人も現れるだろう。またそういうプロジェクトに若い人たちが集まり、既成概念に囚われたり目先の成果ばかりを追わない柔軟な発想での調査研究を積み重ね、新たな環境学の地平を切り開いてゆく。こういうサイクルが続くよう、関係者みんなで頑張ってくださいと思う。

#### ふじた・わたる

森林をめぐるポリティカル・エコロジーが専門。おもに東南アジア各地で住民が主体的に森林を管理・利用する動きを追いかけている。2004年4月から2005年3月まで地球研非常勤研究員。2005年4月、甲南女子大学講師。2008年4月より准教授。



所員紹介—私の考える地球環境問題と未来

## 湖水や堆積物から ウイルスの動きを知る

### 本庄三恵

(地球研プロジェクト研究員)

口蹄疫や鳥インフルエンザの騒動でご存じのように、病気にかかった家畜の移動禁止や消毒の徹底にもかかわらず、ウイルスはどこからか侵入し、新たな集団に感染します。ウイルスを絶やすため、人類の英知と資金を集結しても、感染拡大を食い止めるのは難しい現状です。しかも、感染症が広がったとき、いつも課題として残るのが感染ルートの解明です。

### 水中のウイルスをモニタリング

私たちのプロジェクトは、「人間が引き起こす環境変化が感染症の拡大を招く」との仮説にもとづいて、病原生物の発生を引き起こす背景の調査・研究を進めています。なかでも、コイヘルペスウイルス(KHV)病をモデルとして、「人間による環境変化—感染症の発生・拡大—人間生活の変化」の相互作用環を明らかにすることを目的としています。

感染症の発生・拡大を引き起こす病原生物の自然環境での密度は、きわめて希薄です。したがって、病原生物を検出すること自体が難しく、その動態がよくわかっていないのが現状です。

そこで、まずKHVの環境中動態を明らかにするために感度のよい定量方法の確立に取り組みました。具体的には、4ℓの湖水をフィルターでろ過濃縮し、そこからウイルスのDNAを抽出します。次に、その雑多なDNAのなかからKHVのDNAだけを検出、定量するという方法で

す。このように希薄なKHVを効率よく濃縮し検出感度を上げるとともに、水質によって変化する濃縮効率をサンプルごとに評価することで、定量を可能にしました。

この手法を用いた野外調査によって、かなりの量のKHVが水中に存在することが明らかになりました。これまでは、病気の広がり把握するには宿主のコイを捕まえてウイルスを検出する必要がありましたが、池や川の水を調べるだけでウイルスの有無を調べることができるようになりました。

今後は、河川水や湖水を用いてウイルスをモニタリングすることによって、大量死が起こる前に病気の発生を予知できるかもしれません。つまり、環境中の病原生物の検出は、感染ルートの解明だけでなく、病気発生の予測や予防に役立つことが期待されているのです。

### 人間活動がウイルスの動態に与える影響

KHVのモニタリングから、病気が顕在化していない場所にもウイルスが存在することがわかってきました。逆にいえば、ウイルスがいても病気が発生しない環境が存在するという事です。このことは人間が環境を変化させることで病気が発生しにくいようにも、しやすいようにもできる可能性を示唆しています。私たちは、病気の発生・拡大と人間活動のつな



琵琶湖の内湖で堆積物をサンプリング。意外にコツと体力が必要

がりを知る大きな手がかりとなるはずだと考えています。

さらに、KHVの水中以外の存在場所として着目しているのが堆積物です。その濃度は水中の約100

倍あることが明らかになりました。室内実験によって水中に含まれる鉱物などの懸濁物質がKHVを吸着し、堆積物に移行させることもわかってきました。

ウイルス一般の特徴として、静電的に土壌粒子などに吸着されやすいことはこれまで知られてきました。しかし、そうした現象に人間活動という視点を加えて環境中の動態を理解することはほとんど行なわれていません。温暖化が原因ともいわれる近年の洪水、濁水の増加や<sup>しゅんせつ</sup>浚渫に伴う堆積物の巻き上げなど、人間活動がウイルスの動態と生残にどのように影響を与えているのか、これからの研究課題です。

これまで自然科学だけの世界に浸っていた私ですが、地球研にきて人間活動の影響という要素を強く意識する必要が出てきました。地球環境問題という大きなテーマを扱うには、分野の異なるさまざまな人たちとの交流は重要です。なぜそうなったのか、科学的にしっかりした裏付けが必要であるいっぽうで、問題についての多面的な解釈も不可欠です。地球研での経験は、今後の私の研究生活にとって貴重なものとなると確信しています。

イスラエルにて国際ワークショップ参加と現地視察。イスラエルでは食用のコイと観賞用のニシキゴイの養殖がさかん。ニシキゴイはヨーロッパにも輸出されている写真はコイヘルペスウイルス研究の第一人者、Kotler教授(右から2番目)の研究グループと。手前が筆者



### ■リーダーからひとこと

川端善一郎(地球研教授)  
飽くなき探究心、粘り強さ、執拗さ、忍耐。これらは一見華やかな研究成果に隠れてしまうが、発見や新しい概念を生み出す力になる。最近、国際誌に発表した本庄さんの論文がこれを語っている。本庄流の研究態度で、これからも成果を上げることを期待したい。

### ほんじょう・みえ

■略歴  
2006年7月 京都大学大学院理学研究科 博士(理学)取得  
2006年8月～ 現職  
■専門分野 陸水学、微生物生態学  
■地球研での所属プロジェクト  
「病原生物と人間の相互作用環」  
■研究テーマ ウイルスの環境動態の解明  
■趣味 山登り、運動、旅行  
■最近やりたいこと 上に趣味と書きながら運動不足なので、思いっきり体を動かしたい

イベントの報告

第8回 地球研地域連携セミナー

報告

**多様性の伝えかた  
—子どもたちのための自然と文化**  
2010年10月10日(日)13:00~17:30  
(名古屋大学豊田講堂)  
主催:地球研、名古屋大学

「生物多様性の大切さをどのようにして次世代へ伝えていくか?」。本セミナーは経済価値だけで計ることのできない生物多様性の重要性について、広い意味での「教育」と、「文化の多様性」をテーマに名古屋大学との共催で行なわれました。

基調講演にはアフリカから南アメリカ南端までの人類の旅をたどった「グレートジャーニー」の冒険家、関野吉晴氏(武蔵野美術大学教授)が登壇し、世界各地でみた多様な衣食住の事例をもとに、人類の分散を進めたパイオニアたちが遺伝的にではなく、文化を築くことによって地域の自然を受け容れてきたと論じられました。

地球研の辻野亮上級研究員は、屋久島での生態学的研究と地元への成果発信の経験をもとに、生物多様性の魅力と人知で量り難い自然の理不尽さを紹介しました。神松幸弘地球研助教は子どもたちに生物多様性を理解させる活動を報告し、依田憲名古屋大学准教授はビデオを使い動物の視点からみた世界を、夏原由博名古屋大学教授は里山の自然や食事などみずかな生物多様性とその恩恵を紹介しました。

パネルディスカッションでは阿部健一地球研教授と横山智名古屋大学准教授が司会にたち、4名の講演者とともに参加者から寄せられた質問をもとに、具体的な教育の取り組みや文化の多様性についての議論を行ないました。当日はCOP10開催1週間前でもあり、約200名の熱心な参加者に恵まれました。(神松幸弘)

地球研・愛媛大学・西条市共催  
市民シンポジウム

報告

**未来につなぐ地下水の科学  
—水の都、西条からの発信**  
2010年9月23日(木)13:00~17:00  
(西条市総合文化会館)

世界の3分の1の人びとが利用する地下水は、人間活動の拡大とともに流域だけでなく地球規模の社会や自然の変化の影響も受けるようになってきました。しかし、わが国を始

め多くの国において、地下水を含めた水管理のしくみは未整備な状況にあります。未来の水環境に対応できる社会の創出には、目に見えない地下水の姿を地表水と同じように捉えられる手法の開発と、それがもたらす水・物質循環情報をもとにした制度設計を統合する、新たな地下水科学が必要です。愛媛県西条市は、11万市民の生活用水のほか農業・工業用水を地下水に依存する水都市です。地球研では、西条市の将来にわたる安定した水資源確保に向けた多面的な自然科学研究を実施しており、2009年には西条市と研究協力を締結しています。

当日、地球研の谷口真人教授は、海底湧水の研究成果を紹介しながらシンポジウムの意義を説明しました。続いて嶋田純熊本大学教授は、地下水制度の取り組みが進んでいる熊本の科学研究と水管理の関係について、さらに高瀬恵次愛媛大学教授は西条市の水資源評価とその問題点を、筆者は市民との共同により明らかになった地下水脈の研究成果を発表しました。西条で始まった水研究が、行政や市民との交流を通して、設計科学へと進化することを期待します。(中野孝哉)

COP10 せかい SATOフェスタ

報告

**世界古代文明フォーラム  
「古代社会の生物多様性  
~自然開発の歴史と共生の世界観~**  
2010年10月7日(木)~9日(土)  
(愛・地球博記念公園 国際児童館記念会館ホール)  
主催:愛知県立大学、朝日新聞社  
共催:総合地球環境学研究所、アリゾナ州立大学、南山大学人類学研究所

「人間は太古から生物資源を開発し、多様な文化を発展させてきた。現在の生物多様性の危機は、人類の過去の営みの延長線上にある。過去の失敗と成功の事例をふまえて、人類の将来を考えていくべきだ」。こうした問題意識で開催された本フォーラムでは、まず2日間にわたって愛知県立大学で学術ワークショップを行ない、縄文文化、中国古代文明など世界各地のさまざまな古代文明について議論を深めました。ここで共通認識とされたのは、それぞれの文化でやり方は異なれども、人間が太古から人と自然のプロセスに介入し、生態系や動植物を改変してきたということでした。

メソポタミア文明やインダス文明、アンデ



ス文明では、草本植物や哺乳類の飼いならし(domestication)によって、自然を大きく変化させてきました。いっぽうで、顕著な栽培植物や家畜の品種がみられないアマゾンや日本の縄文文化でも、生態系サービスをより効率よく得られるように景観の「飼いならし」、つまり森林を育て、多年草や木本植物から食料を得るために生態系を改変してきたことが、それぞれの講演で改めて確認されました。公開フォーラムでは、「過去の文化や伝統の研究は、生物多様性への負の影響をどのように減らすことができるか」という見識を提供できる」という考古学から現代の地球環境問題へのメッセージが示されました。(湯本貴和)

COP10で地球研ブースを出展

名古屋市で行なわれた生物多様性条約の締約国会議(COP10)開催中の10月23日から29日まで、地球研は本会議場前の広場に展示ブースを出展しました。内容は、地球研における多様性研究などの紹介パネル(地球研の研究の全体、世界的に広がる14のプロジェクトのフィールド、教育・広報活動のようす、山村プロジェクトと湯本プロジェクトの具体的な成果など)、大型モニター(プロジェクト紹介、生物多様性クイズなど)、生物多様性教材(英語版)の配布、『地球環境学事典』を含む最近の地球研出版物の現物展示などでした。ブースは日本政府・文部科学省の一角の小さなテントに設置され、スタッフが常時張りつく体制をとりました。期間中の来訪者は1,000名近くを数え、熱心な質問も多く寄せられました。それぞれに楽しんでもらえたとは思いますが、このようなブース展示だけで研究の結果を一般の人に理解してもらい難しさも感じました。しかし、要覧を手にとってみたり、持ち帰る人も多く、少なくとも日本に地球研というものがあるって、文理融合の研究によって環境問題に取り組んでいることは発信できたのではないのでしょうか。(山村則男)



## 研究活動の動向

### 平成22年度 受託研究費

2010年10月1日現在

区分	委託先	研究代表者	課題名等
地球環境研究総合推進費	環境省	谷田貝重紀代	アジアの水資源への温暖化影響評価のための日降水量グリッドデータの作成
地球環境研究総合推進費	(独)国立環境研究所 (環境省再委託)	谷口真人	環礁上に成立する小島嶼国の地形変化と水資源変化に対する適応策に関する研究
地方自治体からの受託研究	愛媛県西条市	谷口真人	道前平野沿岸域における地下水調査
環境研究・技術開発推進費	福島大学 (環境省再委託)	川端善一郎	マイクロゾムを用いた生態系リスクと影響評価システム手法の開発 (マイクロゾムの構成微生物群と安定性確保のための操作条件の最適化およびモデル化)
地球環境研究総合推進費	国連大学高等研究所 (環境省再委託)	湯本貴和 秋道智彌	里山・里地・里海の生態系サービスの評価と新たなコモンズによる自然共生社会の再構築 —里山・里地・里海の文化的価値の評価
新たな農林水産政策を推進する 実用技術開発事業	石川県水産総合センター (農林水産省再委託)	中田聡史	漁業を省エネ構造にするための海況予測技術の開発
国際医療研究開発事業	国立国際医療センター	門司和彦	開発途上国における保健医療サービス強化のための学校保健普及についての県レベル研究
先端計測分析技術・機器開発事業	矢崎総業(株) ((独)科学 技術振興機構再委託)	井上 元	二酸化炭素モニタリング用超小型計測装置
地方自治体からの受託研究	愛媛県西条市	中野孝教	西条市の堆積物の起源推定と元素吸着実態の解明研究
地球規模課題対応国際科学技術 協力事業	(独)科学技術振興機構	縄田浩志	ストライガ防除に資する知見の集約と普及
異分野融合による方法的革新を 目指した人文・社会科学推進 事業(課題設定型研究領域)	(独)日本学術振興会	秋道智彌	日本の環境思想と地球環境問題 —人文知から未来への提言
ひらめき☆ときめきサイエ ンス~ようこそ大学の研究室へ~ KAKENHI(研究成果の社会還元・ 普及事業)	(独)日本学術振興会	中野孝教	地域連携による環境動態モニタリング教育の実践
民間等との受託研究	(財)日本水土総合研究所	渡邊紹裕	気候変動の農業・水資源管理に関する調査研究の世界的動向調査業務
先端計測分析技術・機器開発事業	(独)科学技術振興機構	井上 元	世界標準をめざした光学的二酸化炭素自動測定器の実用化開発

### 学術協定の締結

**研究プロジェクト「温暖化するシベリアの自然と人—水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応」とロシア科学アカデミー永久凍土研究所**

〈期間 2010年4月1日～2014年3月31日〉

東シベリアにおける凍土表層の水環境、温暖化による地形変化(サーモカルスト現象)、森林動態、地下水氷—地下水動態に着目した共同研究を進めます。

**研究プロジェクト「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト—そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」とインドネシア大学**

〈期間 2010年7月29日～2013年7月29日〉

両機関の学術交流と国際協力の促進に取り組みます。

**地球研と九州大学東アジア環境研究機構**

〈期間 2010年10月25日～2016年3月31日〉

人的交流や共同研究を通じて、東アジア地域の歴史、文化、社会に根ざした環境問題の解決を目指します。

### 研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2010年9月15日～11月14日開催分

開催日	タイトル	主催者(プロジェクトリーダー)	開催場所
9月18日	エコヘルス・プロジェクト ベトナムにおけるサルヒトマラリア国際シンポジウム "Malaria Transmission in Khanh Phu" "Sylvatic Malaria"	門司和彦	地球研講演室
9月18-20日	アラブなりわいプロジェクト 研究会 「ツール・ラーヤ地域における物質文化変容」「エジプト・シナイ半島のサンゴ建築の建築工法と保存修復技術の研究」他	縄田浩志	地球研セミナー室
9月19-20日	佐藤プロジェクト 国際植物考古学シンポジウム 「人間社会史における雑穀の重要性 (Roles of Millets in the History of Human Society)」	佐藤洋一郎	国立科学博物館 日本館
9月22日	第21回中国環境問題研究拠点 研究会「中国と東南アジアの生業転換と健康影響」	中国環境問題研究拠点	地球研セミナー室
9月24日	人と自然:環境思想セミナー vol.34 最終回「エビローグ—そこに在るもの」	佐藤洋一郎	地球研講演室
9月30日	第4回 EPM勉強会「地球研における『環境政策の決定メカニズム』研究のアジェンダ設定」	EPM勉強会	地球研セミナー室
10月1日	第2回 食リスクプロジェクト 研究会「途上国における PESの制度設計とフィリピンラグナ湖流域への適用」	嘉田良平	地球研セミナー室
10月22日	中国環境問題研究拠点 第22回研究会「メコン川を巡るハイドロポリティクス—中国と下流諸国との関係—」	中国環境問題研究拠点	地球研セミナー室
10月22日	第32回 レジリエンス研究会「用水路灌漑農業の洪水に対する脆弱性と回復能力:パキスタンの事例」	梅津千恵子	地球研講演室
10月25日	エコヘルス・プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」「外国援助による貧困対策と生物多様性の危機」 「タイ肝吸虫感染リスクゾーンに関する調査報告」	門司和彦	地球研セミナー室
10月26日	第5回 EHEZセミナー「いよいよ執筆体制を考えよう！」	立本成文	地球研講演室
10月27日	第13回 資源・地球地域学プログラム 合同定例会 「タイ国におけるジュゴンの音響観察の紹介—水中鳴音情報解析によるジュゴンの行動生態研究—」	渡邊紹裕	地球研セミナー室
10月28日	第5回 EPM勉強会 「中国の環境政策実施過程における地方政府の役割—中国西北部・黒河流域の『節水政策』を事例として」	EPM勉強会	地球研セミナー室
10月29日	第5回 全球都市全史研究講演会 The 5th Whole Earth Urban Historical Research Seminar 『南アジアのメガ・シティ研究(1)ムンバイの歴史的形と現在』 「植民地期における居住環境の形成とボンベイ・インフラメント・トラストによる住宅供給」 「19世紀の産業資本の形成と都市建設」	村松 伸	京都大学アジア・アフリカ 地域研究研究科 第1講義室
11月2日	第5回 中国環境問題研究拠点 国際シンポジウム「西南中国の開発と環境・生業・健康」	中国環境問題研究拠点	雲南大学科学館2楼報告庁 (中国昆明市)
11月4日	イリプロジェクト講演会 "Unique biological resources and unique biodiversity of the Caspian Sea at present and in the past"	窪田順平	地球研セミナー室
11月6日	第3回 サラワク研究会「サラワクにおける森林開発の背景と地域への影響について」	山村則男	地球研セミナー室
11月10日	地球研・生存知イニシアティブ・セミナー —「リスク」を考える 「リスクの客観性と主観性—リスク・コミュニケーションの立場から」 「疫学からみたリスクと疾病原因論(あるいは「ロスマンの疾病原因論とリスク—疫学から」)」 「個別リスクと全リスク」	佐藤洋一郎	地球研講演室
11月11日	第6回 ジャカルタ都市研究会 / The 6th Jakarta Seminar "Disparity Between Jakarta and Kyoto -The End of Public Spaces versus the Celebration of Public Spaces"	村松 伸	地球研セミナー室

## イベント情報

詳しくは地球研HPをご覧ください。 <http://www.chikyu.ac.jp>

### 公開シンポジウム

#### 告知 日本列島1万年の歴史からみた 生物多様性と資源利用の知恵

2010年12月4日(土)13:00~16:50  
(京都府会館会議場) (開場)12:30 ※入場無料

主催:地球研「日本列島における人間-自然相互間の歴史的・文化的検討」プロジェクト(列島プロジェクト)

#### ●問い合わせ先

地球研 列島プロジェクト  
Tel: 075-707-2474  
詳しくはプロジェクト HPをご覧ください  
<http://www.chikyu.ac.jp/retto/>

### 国際会議

#### 告知 森林をめぐる伝統知と文化に関する 国際会議 第3回「里山と多様性」

The Third International Conference on  
Forest Related Traditional Knowledge  
and Culture in Asia

2010年12月14日(火)、15日(水)

言語:英語

(石川県政記念いのき迎賓館 ガーデンルーム)(金沢市)

主催:地球研、金沢大学

※地球研山野河海イニシアティブ国際会議、  
COP10 パートナーシップ事業

#### 【同時開催】

#### 子どもたちがつくる国連環境ポスター展 「子どもたちが感じた生物多様性 2010」

国際生物多様性年 クロージング・イベント 連携展示

#### ●問い合わせ先

地球研 研究推進戦略センター支援室  
Fax: 075-707-2510  
Email: [forum@chikyu.ac.jp](mailto:forum@chikyu.ac.jp)



「地球研ニュース」NO.28 12ページ 前略地球研殿のタイトルは、正しくは「いれもの」と「たましい」と、三つめの小見出しは「文理融合:目的から手段へ」でした。地球研ホームページのWEB版に正しい記事を掲載しています。

編集委員 ●阿部健一(編集長)/湯本貴和/梅津千恵子/神松幸弘/源 利文/鞍田 崇/林 憲吾

### 受賞

#### 久米崇・プロジェクト上級研究員が 「農業農村工学会研究奨励賞」 を受賞

2010年8月31日、地球研プロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス」の久米崇(プロジェクト上級研究員)が、平成22年度農業農村工学会大会において、「乾燥地の塩害農地における塩の起原・動態の分析と評価に関する一連の研究」により研究奨励賞を受賞しました。

研究奨励賞は、農業土木に関する学術または技術の進歩に寄与すると認められる優秀な業績を上げた会員に授与されるものです。

### 招へい外国人研究者の紹介



JASHENKO, Roman  
ヤシェンコ・ローマン

- 所属プロジェクト 民族/国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷
- 招へい期間 2010年10月5日~2011年3月25日
- 現職 カザフスタン科学アカデミー動物学研究所上級研究員
- 専門分野 動物分類学・昆虫生態学

### 人事異動

2010年10月1日付け  
【採用】

久米 崇(研究推進戦略センター特任研究員(特任准教授)  
← 地球研プロジェクト上級研究員より  
※研究推進戦略センターの基幹研究ハブに関する業務に従事します

鞍田 崇(研究推進戦略センター特任研究員(特任准教授)  
← 地球研プロジェクト上級研究員より  
※研究推進戦略センターの基幹研究ハブに関する業務に従事します

### 編集後記 雪景色の地球研より

遅くなりましたが「地球研ニュース」No.29をお届けします。今号は国際シンポジウムとキッズ・セミナー、プロジェクト主催の環境思想セミナーのふりかえりを、座談会形式で行なっています。地球研はさまざまな分野の研究者が集まっているため、所員間の議論の「場」が一番の売りだと考えています。イベントなどの告知・報告はもちろん、ニューズレターではそうした議論の場をこれからも積極的にお届けします。(編集室・菊地)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」  
隔月刊  
Humanity & Nature Newsletter No.29  
ISSN 1880-8956

発行日 2010年12月1日  
発行所 総合地球環境学研究所  
〒603-8047  
京都市北区上賀茂本山457番地の4  
電話 075-707-2100(代表)  
E-mail [newsletter@chikyu.ac.jp](mailto:newsletter@chikyu.ac.jp)  
URL <http://www.chikyu.ac.jp>



編集 定期刊行物編集室  
発行 研究推進戦略センター(CCPC)

制作協力 京都通信社  
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。